ファイアボール・ブルース2

桐野夏生

Natsuo Kirino

文春文庫

文春文庫

©Natsuo Kirino 2001

ファイアボール・ブルース2

定価はカバーに表示してあります

2001年8月10日　第1刷

著　者　桐野夏生（きりのなつお）

発行者　白川浩司

発行所　株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23　〒102-8008
TEL 03・3265・1211
文藝春秋ホームページ　http://www.bunshun.co.jp
文春ウェブ文庫　http://www.bunshunplaza.com

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-760204-0

文春文庫

ファイアボール・ブルース2

桐野夏生

文藝春秋

目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

入門志願 9
脅迫 47
リングネーム 85
判定 123
嫉妬 163
グッドバイ 201
近田によるあとがき 238

ファイアボール・ブルース2

入門志願

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

荒れた試合だった。

ヒールの白蛇（はくじゃ）さんが木刀を振り回して暴れまわり、南側特別リングサイドのパイプ椅子は全部倒されて会場は滅茶苦茶になった。荷物を抱えた客が、右に左に逃げ惑う。千葉市の体育館で行われた最終戦のことだ。

切替（きりかえ）リングアナの声が響く。

「場外乱闘！　非常に危険です！」

「危ないです！」

「そこ、どいてください！」

自分たちセコンドに付いた選手は、いちはやく客を避難させる。怪我をさせてはならないし、選手の格闘の場所を確保しなければならないからだ。だが、冷え込んだ十二月

のことで着膨れた客の動きは鈍かった。おまけに雨が降っているので、床には傘が何本も転がっている。それにつまずいて転ぶ客も続出していた。

「このやろうっ！」

そんなことは全く目に留まらないかのように、興奮した白蛇さんは木刀をリングサイド席の向こうに高く放り投げた。飛んでくる木刀を避けて、ワーッとどよめきと悲鳴が起きる。危ない。ちらっと、一緒に赤コーナーの三好さん側のセコンドに付いている与謝野ミチルも自分の方を見た。白蛇さんの形相が変わっていた。

「三好、このーっ！」

相手は三好美香子さんだった。第三試合のシングルマッチ三十分一本勝負。もともと相性が良くない。同期生なのに、あちらは大将のアロウさんにくっ付いているし、白蛇さんはヒールの一匹狼。無理もない。

だけど直接の原因は、試合開始直後から三好さんが白蛇さんをコーナーポストに逆さに吊し、何度も何度も腹に蹴りを入れたことにある。それで、短気な白蛇さんがキレてしまったのだ。

白蛇さんは、転んでまだ立ち上がれない三好さんに、折り畳んだパイプ椅子を投げ付

けている。一つ、二つ、三つ、四つ。これで終わったと思った三好さんが、顔を庇(かば)っていた両腕を下ろし、ぐっと白蛇さんを睨み付けて叫んだ。

「白蛇。いい気になんなよ、てめぇっ！」

これから三好さんの反撃が始まるのだ。が、それを横目で見ながら、白蛇さんがセコンドに付いている子分の北本(きたもと)さんに手を差し出した。

「木刀！」

北本さんは焦っている。まだ探しに行ってなかったのだ。木刀はさっき白蛇さんが放り投げた時に、通路のはるか向こう側まで飛んで行ってしまっていた。自分と与謝野はそれに気付いていたが、三好さん側のセコンドなので、拾いに行くことはできない。

「木刀っ！」

苛立った白蛇さんが怒鳴り付け、北本さんが慌てて走って行く。会場が何となくしらけかけた。

その時突然、観客の中から若い女の子が走り出て来て、黒い傘を白蛇さんの手に押し込んだ。

「これ、使って、ください！」

太くてしっかりした木の柄が付いている。先は尖っていて十分な凶器になった。白蛇さんも、自分たちも、客も、全員驚いて彼女を見た。年は権藤や春木のちょっと下くらい。中学生ってところだろうか。顔つきはごく平凡で、ショートカットに黒のピーコート、黒のパンツ。プロレスを見てるうちに血が騒いだのに違いない。時々、こういう鼻血を出しそうなのがいる。

白蛇さんはどう出るのだろうか。観客も自分たちも皆、白蛇さんをじっと見つめた。しかし、一瞬、間があった後、

「んなもん、使えるかよ！」

白蛇さんは、その傘を床に叩き付けた。そして三好さんの髪を掴んで立たせると、今度は東側の特別リングサイド席まで引きずって行った。

傘の女は、困ったように呆然と立ち竦んでいる。可哀相な気がしたけど、自分たちの仕事に素人は手出しさせない。白蛇さんは正解だ。

「このやろうっ！」

ところが、白蛇さんが三好さんをパイプ椅子の列にまた突き飛ばした時、もっと凄いことが起きた。どこからか木刀が飛んできて、白蛇さんの足元に落ちたのだ。

「誰だっ」

白蛇さんがすごい形相で振り向いた。すると、今度は若い女が怒ったように両腕を腰に当てて仁王立ちし、白蛇さんを睨み付けていた。

「何だよ！」

「いい加減にしろよ。年寄りに当たりそうになったじゃねえか！」

そう言った女は自分よりちょっと上くらいの年格好か。だから、二十三、四歳。黒く長い髪をまっすぐ垂らして、ＯＬみたいな格好をしていた。ブルーのミニのコートに白いストール、黒いスエードのロングブーツってやつだ。でも、目付きは鋭くて白蛇さんの前でもたじろがない。どうなるのだろう、とみんな息を呑んだ。

が、戻ってきた北本さんが慌てて背後から白蛇さんの腰を抱いて止めた。それに釣られて、セコンド全員でいきりたつ白蛇さんを押さえる。

「あの女、白蛇さんにメンチ切ってる……すげえ」

白蛇さんの腰を後ろから必死に押さえていると、新人の権藤が呆れたようにつぶやいたのが聞こえた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton